

〈手〉の世界制作について

われわれの身体は、身体運動を通して、われわれが生きている世界の創造に携わっている。身体の全体が世界の創造に関わっているのであるが、身体のままさまざまな器官の中で、手は最も多様な機能を有している。手は、それが届く範囲の内外の事物に対して、また手が付随しているところの身体、さらには手そのものにまで関わって、実に無数のしかたで使用されるのである。

まず、手は、身体すべての部位の中で最大の適応性を持っている。正確に言えば、手はわれわれの周囲にあるいろいろな形態を模倣することができるのである。手は、世界とのあらゆる距離をふさぎ、指先で世界に順応し、表面を手探りして形を発見し対象の輪郭をなぞりながら、周囲の事物を包み込むことができる。しかし、これは事柄の半面ではない。手は、周囲の事物を変化させ形を刻むことによって、世界を形成することができるのだ。手は一方でそれ自身最も多様な形態を有しており、他方、手の周りにおける対象に絶

グンター・ゲバウア 樋口 聡 訳

えず違った形態を与える。この二面の適応性によって、手は、われわれの世界の構成、身体を通しての世界制作（ネルソン・グッドマン）の中心に位置するのである。

触れる、なぞる、握る、たたく、ひねる、などの手の使い方によって、われわれは世界の構成を手から始めるのであり、結び付けられ操作された世界、われわれが文字通りつかむ現実を構成する。しかしながら、同時に、手は対象を必要とする。対象との関係がなければ、手はいかなる機能も発揮することができない。有意義に機能するために、手は、具体的な事物の世界を持たねばならないのである。対象を扱うことは、その対象を変形させることもあれば、手それ自体に変化をもたらすこともあり、あるいは両方が起こることもある。手は、次から次と世界を把握する行為を行うのである。われわれの言語では、「手」にまつわるたいの表現は、この変化と影響の意味を喚起する。⁽¹⁾

手の第一の特徴は、世界に対して開かれていることである。手は事物に関心を示し、そして、事物に依存している。第二の特徴は、手は事物と身体を媒介することである。手はその身体の一部である。手は、身体から身体を取り巻く世界への橋渡しあるいは転移をもたらす。第三の特徴は、手の自己関係性である。手は対象を探り当てるように、その探索を手自身にも差し向ける。手が自らを形成するのは、それを使用することによってのみである。手は、事物に、他者に、そして手自体に、まさに関係をもつ器官であり、このことがわれわれ自身の個人的発達経過において多様性と複合性を増し続けるのである。手が微妙な差異を含んだ触覚を持つことができない発達の初期の段階では、口が感受性のより鋭い微細な感覚を持つている。しかし、口は、社会的相互作用という習慣的行為を實踐するのには、手よりも適していない。

事物と身体の間には、両者にその痕跡を残す。操作された対象が特定の「応答」に応じるように、人は、手と対象との相互作用の仕方を、内的イメージあるいはモデルとして、一つの運動図式に統合する。手がいかにか対象を変化させるのかについて思い至る第一の例は、事物を制作することである。しかし、それは、広い範囲にわたる手の可能性のほんの小さな断片にすぎない。触れることがいつも対象に変化を与えるわけではないが、触れることは、人が対象と関わる仕方を変化させる触覚的接触を生み出す。触れることは、事物

を把握する一つの方法であり、それが確かにその対象であることを確かめる方法であり、そしてその事物を指示することなのだ。

触れることは、対象が存在していることの確からしきを生み出す。この意味で、触れることは創造の基本行為である。触れることは、手・対象 (objects-for-the-hand) の生成である。触れる行為においては、触れられる事物は、身体すなわち触れようとしている手と同じように存在感あふれるものであることをわれわれは確信する。触れることは、触れられる事物という一つの到達点に至る。それは手から独立したものであるのだが、手それ自体と同様に生き生きしたものだ。触れられる対象は、それが主体の行為と応答へと組み入れられることにおいて、存在する。手の使用には一つの強力な構成的側面があるのであるが、二つの事柄が手によって創造される構成へと関わる。一つは事物の反応であり、もう一つは、手自身がいかにか構造化され形作られるかということである。

触れることは、或る対象が存在することのわれわれの確信をもたらす一つの事柄であるということ述べた。さて、ここで議論を、触れることの次の側面、すなわち指示することに進めよう。或る対象を指示するとき、われわれはその特定の諸特徴によってその対象を選び出している。手はその対象を指示し、特定の対象としてその対象を指示するのである。しかし急いで付け加えるのであるが、指示された事物の諸特徴は、それを指示する行為と切り離されたもの

ではない。それらの諸特徴は、単なる心的活動を通して、知性的・意図的行為を通して、言い換えれば、理解を通して、身体が関係することなく、構成され生成されることはありえない、ということをも明記しておくことは重要である。対象を純粹に知的に指示することがありうるなどと考えるのは誤りである。われわれが或る対象を指示するとき、われわれはそれを身体によつて、そして身体と関わりかたちで、行うのだ。指示される行為の中で、対象は手と同様に、まさに具体的に存在感あふれるものとなる。指示された対象は、触れられる行為における手―対象としてその対象が生成されることにおいて、存在するのである。手の使用の二重性が、触れられる対象を創造するのである。

さて、われわれは事物を扱うために手をどのように訓練するのか、われわれが手を使用する方法の特徴、そして捉えられた事物がいかに対応するのか、に目を向けることにしよう。一方の手が、単独で、対象に対して触れ、感じ、指示し、働きかけるために使用される。もう一方の手は、その先行する手を助けることができる。手の使い方の社会的側面が増すほど、二つの手の存在がより大きな意味を持ち、それぞれの手の次元が生じることになる。われわれは手をいかに使うのかについての簡単な類型論を以下に展開してみよう。この類型論と手の使用は、二つのしかたで互いに関係している。第一に、(個体発生的)発達経過の中で手の使用の分化が進み(最初にわれ

われは一方の手だけを使い、その後二つの手の調整を図る)、そして、経験の世界の絶えず新しい次元の創造と構成がなされるのである。

操作したり、感知したり、表現したりという多様な機能を手が獲得するためには、長くて根気強い「訓練」が必要である。その訓練の過程の中で、手の使用は一層の分化を増していく。手の使用のさまざまな段階を考えてみよう。新生児は、手の使用の最も単純な形を示す。そこでは五本の指と手のひらは、ひとまとまりの、分割不可能な機能的単位を形成する。この段階では、指は分化しておらず、また二つの手が協同して働くこともない。赤ん坊の手は事物に触れ、事物をつかむことができ、対象の表面と形を感じることができ、そして自分の手の運動パターンを形成することができる。手によつて形作られた対象と同調して、手の使い方は身体イメージの中に示される。そのイメージは、取り込まれた対象が形をなしようという点において、特に一つの重要な機能を有している。人間の発達経過の中で、そのイメージは、われわれの環境と運動に対して、ますます自立的になっていくのである。

発達の第二段階で、赤ん坊の親指はその他の指と独立して動くようになる。そうして物をしっかりと手につかむことができるのである。手を見てみると、親指とその他の指の間には空間があるのがわかる。それは子供が持つ最初の人為性を有する空間的差異であつて、

われわれは後にそれを物を測定するために使う。第三段階で、人差し指が動き始め、それは、指の運動、指の相互関係、そして指の微妙な協調動作の始まりである。このことが道具の使用を可能にする。この時点で、赤ん坊は親指と人差し指の二つの感受性と可動性を持った表面の間で対象を感じ、つかむことができるのである。

第四や第五段階で獲得される、その他の指の自立性は、手に対する訓練の結果である。この指の使用は非常に知的である。タイプライターを打つことやピアノを弾くことを考えてみればよい。そこでは指はまさに文字通り訓練され、「慣れさせられる」のだ。ところで、手の構造的可能性は実に大きいことがわかる。手の分節可能性は、手が空間と時間を分け始めることができることを意味している。数を数えることは、この空間・時間の構造化の極めて良い例である。数を数えることは次から次と指の運動を引き起こし、それぞれが数を示している。ここでは、それぞれの数を言うだけではなく、一つの数から次の数へと動いていくのである。

すべての指が自立性を獲得したとき、この能力は十分に開花する。そのとき、手は、区分けをしたり、組み立てたり、つなぎ合わせたりの最もすぐれた道具となる。これらの行為は、もはや何らかの一つの形に結び付けられるのではなく、それぞれのルールを工夫し、作り出すことができるのである。手を使うことによって、われわれは、われわれの周りの世界を、われわれ自身のルールに従って構造

化された、異なる秩序のもとに置くことができるのである。

とにかく、絶えず分化しつつある手の使用は、事物の世界の新しい次元、領域、レベルを生み出す。手そのもの、そして手が触れ、つかみ、感じるあらゆる物から出発して、身体の外部の対象だけでなく身体それ自体も、発見され、そして形をなすのである。身体は、手の介入に対し触覚的に（この場合は自己受容的に）次々と反応する感覚的な表面を身にまとい、繊細に構造化された形態へと変えられる。この反応は象徴的に解釈されるのであり、象徴において後からわれわれが気づくものでもあるのだ。

手の使用によって形をなしてくるさまざまな世界に目を向けてみよう。われわれはすでにその世界の一つの特徴を描写した。それは、おそらく第一の世界と考えられる、確からしさの世界、われわれが指示することのできる世界である。触れること、なぞること、形作ること、これらの手の運動は、われわれの指先の世界に見出される事物を生成する反復である。それらは、「模倣」「再生」、そして一種の「周囲の事物の包み込み」として区別することができる。それぞれの場合、模倣される、あるいは再生される、あるいは手によって包まれる対象は、まず何と言っても、手の使用によって生成されるのである。それは、手と手の運動に依存した対象なのである。

第二の世界は、整えられた空間世界である。手が空間へと届くとき、手のなぞりや刻みが、この世界の構造を生み出すことになる。

その構成において、手は視覚と一緒に働く。この協同は、より高いレベル、より複雑な仕方へと進展する。したがって、生み出された空間は、感じられた空間であると同時に見られた空間でもあり、この経験の二つのあり様は、互いに分けられることはない。だからと言って、両者がそれぞれに解消されてしまうのではない。そうではなく、感じられる物と見られる物は、互いに補い合い、連続したものと見なされるのである。われわれの触覚と視覚は協同的に働くのであるから、もっぱら人間にのみ当てはまることではあるが、視覚的な受容は、触覚的な受容の経験でもある。われわれが見る対象は、その対象をわれわれが手でもつてつかみ探り当てるときの経験によって「満たされて」いるのだ。

より進んだ発達の段階でも、視覚は触覚に依存し続ける。触覚は目が知覚する物を確実なものとする。言い換えれば、触覚は、知覚される物の確からしさを保証するのである。つまり、手は、そこにある対象の形と特徴についてさらなる情報を付け加えるのだ。アーノルト・ゲーレンが述べるように、手は目の知覚を続行するのであり、視覚的な受容のいくつかの課題を引き受けるのである。しかし、手が成し遂げる最も重要なことの1つは、手が、知覚の新しい仕方、新しい側面、新しい視点を生み出すという、まさにその事実にある。その創造性は、指示すること、身振りの実行、運動の模倣、すなわち、実に多くの多様な関係性を生み出す手の能力にあるのである。

言葉による名指しは、その目的のために、手が持っているこの構成作用を使う。「言葉とそれに結び付いた対象は、一つの、総合的な経験の結果であり、手による表象である」(エリアス・カネッティ)。この結び付きは手の二つの働きにゲームにおいて明らかになる。すなわち、手が模倣される物の形へと形成されることと、線描や描画の身振りにおいてである。或るモデルに即した線描や描画は、もう一つの世界の存在を現実のものとする。芸術家の身振りは、この世界がそこにあること、そして芸術家はその世界を独自の見方に応じて制作し、そして独自の方法でその世界を組み立てること、その保証をわれわれに与えるのである。

今述べた考えは、すでにわれわれを時間的な構造化の世界へと導いている。経験の世界は身振りにおいて形を与えられるのであり、時間と運動は、連続、反復進行、速さ、リズムとして組み立てられる。例えば、身振りを伴う描画や音楽(最も明瞭な例はおそらくパーカッションであろうが、ブルースでも考えることができる。ブルースは、本質的に、身振りの運動、動きと語りの連係から生まれるものである。)において、時間的図式への空間の統合は特に重要である。二つの流れに目を向ける必要がある。一つは、手の活動は、より一層の表現的性格を帯びてくることである。手によって生み出される形や運動は、手とは異なる、手以外の対象の世界に属する何物かを表現するのである。もう一つは、その表現的な活動にお

ける手は、すべての対象物から自由であり、「それ自体の生き生きしたあり方」(カネットイ)が許容されているのである。手の自由な運動は、(旧石器時代の「芸術」に見られるように)装飾的な形態、リズムを伴う型を生むとともに、穏やかさの身振りをも生む。カネットイが言うように、身振りでの表現は、手自身の生命の、そのもととの意味における最高度の純粹さを維持しているのだ。

同様に、数を数えることも、時空間の自由な形成から生じるものである。数を数えることは最初は恣意的に始まるのであるが、すぐに数を数える原則がしっかりと変更不可能なルールのもとに設定され、その原則は全く厳格に適用される。手全体で数えるのか、それとも一本の指で数えるのか、左から右へか、右から左へか、どの指をどんな順番に使うのか、どんな呼び名を使うのか、こういったことは慣習によっているのであり、その日常生活での方法が話し合いで決められるなどということはない。われわれは同じ文化の中にいる他の人々と同じように数えなければならないのだ。測定や名指しと同様、数え方は強い社会的規制のもとにある。手の動きや数え言葉が決まっているだけではない。運動のリズムや数え方のスピードもまた規制されている。数え方はゆっくり過ぎてても速過ぎてもいけないのである。また、数え方の特定の流れがあり、決められた言い回しを使ってその流れに従わなければならない。このようにして、最初の数の世界、繰り返し構成される秩序が生成されるこ

とになる。それはもはや運動の問題ではない。そうではなくて、その秩序は知的に考えられた或る観念的な秩序の表現なのである。数を数えることは、一つの観念化と一つの空間秩序の両方を生み出すそれらとともに、知的原則に従いながら、実在の世界全体を分節化する働きをするのである。

空間的・時間的秩序は、それら自身の原則に応じて構成されることによって、身体の行為とわれわれの周囲の世界との関係を失う。われわれはこの関係を、われわれの数の数え方、すなわち数えるという社会的実践が、身振りの結果としての数の連続をどのように構成するのかということにおいて、やはり認めることができる。しかしながら、数の観念的な世界は、数を数える初期の身振りにおいてなお見られた身体的要素を排除したのである。

見ることと感ずることの関係はどのように作用するのだろうか。視覚の助けを借りずに手だけを使うとき、触覚に適合して、われわれは違った視覚のイメージを増大させる。同じことがその逆の場合にも当てはまる。われわれの身体の一部が触れられており、ただし(麻痺しているとかその部分が何かで覆われているとかの理由で)その感覚に反応しないといった場合、われわれはわれわれ自身の可能な、そして通常の触覚経験を付け加えるのである。こうしたギャップを埋めるために働く手と目の協調性は、二つの事柄からなっている。一つは、われわれ自身の個人的立場と結び付いた個人

的な経験であり、そして、原理的にすべての人によって観察される視覚的印象である。したがって、言い換えれば、われわれは主観的なものと客観的なものの対立を見るのである。知覚の非対称性に結び付く、この二つの側面は、感情についての言説の特徴である。通常、われわれは、われわれの諸感情の関係を、内的・外的という二重の側面において考える。視覚的印象のような実際の自己受容的経験に類似した代替物を見出すことができるという事実は、われわれの視覚と触覚の密接な結び付き、両者の関係の反転可能性をも意味する相互依存関係を示しているのである。

これまでわれわれは行為する主体だけを考察してきた。個人的な経験と感覚は、外的側面を超えて社会的形式をとるのであり、他者へと伝達可能である。この過程において、視覚的側面を、(自己受容的) 触覚、必要なものとして喚起される準備が整っている感覚の貯蔵庫で補う能力が決定的に重要な役割を演じている。この能力は知的な成果をもたらすものではない。そうではなく、それは、特にわれわれがわれわれ自身に触れる仕方における、われわれ自身の身体で経験され実践される一つの能力である。触覚それ自体を同時に感じながら、われわれがわれわれ自身とわれわれの反応に触れ、それらを観察することができるように、われわれは他者がどのように視覚や触覚に応答するかを類推によって知ることができるのである。手は、視覚と協調して、媒介者として機能する。手は、われわれ自

身の感覚と他者の感覚の間に橋を架けるのである。

これまでのわれわれの考察の結果は意外性を有している。視覚との協調関係において、手の使用は、観念的な数の連続を構成することによる数を数えるという客観化された実践と、同時に、主観的な感覚の世界の構成との両方に至るのである。両者とも、しばしば言語へと関係づけられる。しかし、言語にとって最も基本的だと考えられる機能、すなわち(関係を) 指示するわれわれの能力は、まさにわれわれの手の使用においてまず形作られるということを、われわれは考察したのであった。そして、繰り返すことになるが、指示することは、客観的・主観的世界の構成にとって本質的なことなのだ。言い換えれば、指示することと関係づけることの源泉と機能的な関係は、言語の下に広がるより深いレベル、すなわち身体による世界制作の領域と手の分野に根ざしていなければならないのである。文明化をもたらすテクノロジー全体が、手の社会的使用と関係がある。手は、他の身体部位と異なり、道具を使うため、ゲーム・絵画・音楽のため、書いたり数えたりするため、指示するため、家事を行うため、そして社会的な身振りのために、訓練可能となるのである。われわれの手の使い方は、文明化のレベルを明らかにする。良い行動の厳格な要求、精密に統制された運動、強い象徴的意味付与、さまざまな分節化、そして儀式化などの社会的技術の領域は、手を身体の特別に統制された部位とする。それらの成果のたいいてい

は、個体発生的に見て、われわれの言語形式の発達に先立っており、実際、言語形式の発達を準備するものである。手はそれ自体が社会的生成物であり、社会的世界に秩序を与えるための基本的なものである。われわれの社会の基本的方向、社会の基本的区別は、すべて手の使用において先取りされている。

この考えを展開した最初の人はフランスの文化人類学者ロベール・エルツである。彼の思考の出発点は、人間は二つの手を持っているという事実である。手という「一般性」だけを問題にしている限り、われわれの二つの手の使われ方は同じではないという事実を見逃すことになる。エルツが指摘するように、右手と左手の間にある違いと、それに伴う手の使用の差異は、すべての文化に共通したものである。手の使用は、右手と左手に付与された価値に応じて区分された、右の世界と左の世界に、社会の全体像を分ける働きをする。右手は、人に挨拶をし、物を食べ、神の恵みを祈るために使われる。右手は清らかな手である。それは儀式的行為のために使われる。右手は良い手なのである。これらの価値、成果、性格と対立するものが左手によって示される。右手が許されることは、左手にとっては禁止事項である。言ってみれば、左手は、右手が行ってほしくないことをなすために呼び出されるのだ。機能、象徴的解釈、価値の一種の幾何学が、身体を覆っているのである。二つの手の使用は、実践的機能、象徴的身振り、道徳的価値を区別するのに役立つ、鏡

に映し出されたような対称的対立の図式に従う。器用で純粹で社会的に受け入れられた手と、それと全く反対の手という身体の区別から、われわれは人間を支配している、そして実際には社会の全体像を支配している二元論的秩序を見出すのである。

右と左の区別は、包含と排除の力学をも生む。それは、或る個人やグループがどちらの側に属するのか、すなわち、純粹、廉潔、尊敬に値する側、神聖な側に属するのか、それとも、不純で卑しく、否定的な社会的立場、世俗的な側に属するのか、を決める。右と左の区別は、特に男性・女性の区別に見られるような大きな世界秩序の二元的な差異化の種を含んでいる。この区別は、同時に、象徴と価値の地理学に覆われている。数えることや測定することの空間的な組み立てとは違って、この配置関係は観念的なものではない。つまり、ルールの体系によって構成されているのではないのである。それは、二つの手というモデルに応じた身体による世界制作である。われわれがそれぞれの手を違ったように使うという事実は、何が含まれ何は含まれないのか、何を受け入れ何を拒否するのかを判断する構造、純粹と不純、善と悪を決する構造を生み出すのである。伝統的な社会にとっては、右・左の身体的な二元論モデルは、その社会秩序を象徴的に表現する基礎を形成している。このようにして、社会的空間の分断が、一つの架空の区分線の右と左への振り分けとして、目に見える形になるのである。

われわれが手をどのように使うかについての価値判断はない。しかし、手の使用は、秩序を与える一つの方法、価値を特定するパラメータと空間を設定するための「言語ゲーム」(ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン)を生み出す。思考にとって手を大変重要なものとするのは、表現の方法を見出し、作り上げ、そして磨き上げる能力である。手の実践的機能とともに、手は表現的機能を有しているのである。例えば、握ることは、保持する実践行為、何物かをわれわれの所有へともたらず実践行為である。と同時に、それは、握られている物を超えて、握る人の能力を示している。それは、物が握られる準備が整った状態を形成する能力を示すのだ。このことを以下のように解釈することができる。すなわち、ステージがあり、配役があり、物語の構造を持った日常生活の微視的なドラマのように、握るという行為において、手は、権力と服従の関係を演じるのだ。指示することについて、同様の視点から記述することができる。その場合、人は対象に対する支配を主張するのではない。対象をただ指示するだけなのである。指示という行為には多くの経験が内在している。それらは、手が、指示された対象(あるいはその対象と似ている他の事物)でもってすでに生成した経験なのである。指示された対象の「役割」は、その対象がすでに使用された仕方の中に、探索され作り上げられている。

表現の複合的な事例において、表現された事物とそれに結び付い

た実践課題に対して、手はより大きな自立性を主張する。その自立性は、まさに自立性の期待が最も小さい場合、すなわち模倣において、重要になる。われわれが指で線をなぞるとき、手の諸条件のもとで、すなわち或る運動図式と運動イメージを形成する運動として、われわれはその線を再生するのである。運動図式も運動イメージも、第一に、身体における図式かつ描かれた図として、第二に、描く人の身体による線の型取りの再実行として、与えられた線とは独立に存在し続けることが可能である。手による線の再形成は、はじめの実践行為からは離れ、個人によって自立的に生成される一つの形を創造する。この形はもともとの線との関係において、その違いを主張する。このようにして、たとえ最も単純な反復でさえも、生成的と見なされうるのである。反復は、対象を別の媒体において、運動の形式において、呈示という観点を伴いながら、新たに構成するという点において、所与の対象との一種のゲームを形成するのである。

「手のゲーム」による制作物は、それ自体新しい洞察を与えるものではない。その代わり、それは、行為から獲得された構成物なのであり、そして、洞察のための諸条件を作り出す。それは、反復、指示、手の区別された使用、右手と左手のさまざまな使われ方、そして手の道具的な使用において、作り出されるのである。「手のゲーム」の本質的な成果は、操作される対象それ自体の使用と手によって再創造される対象の使用という、二重化された使用にある。手元

にある諸要素を取り上げ、それらを再び違った媒体において使用する、それらを自立的に使用する可能性は、一般にゲームの成果である。疑いなく「手のゲーム」は、人の人生における第一のそして最も重要なゲームに属するものである。人間のあらゆる他の器官と比べて、手は、世界に対するより直接的な関係、より微妙な分節化、より明瞭な対象化を可能にする。われわれが手にする世界は、手の二重化された使用において、一つの象徴的世界として新たに創造されるのである。その象徴的世界は、実践行為と不可分的に結び付いているのであるが、他者がそこに存在する社会的に形成された世界なのである。

注

(1) ドイツ語では、行為に対する語幹“Handeln”であり、それは手の行為的な意味を含み持つている。

参考文献

Bourdieu, P.: *Le sens pratique*, Paris 1980. (今村・港通訳『実践感覚』みすず書房)

Canetti, E.: *Masse und Macht*, Bd.I, München 1976. (若田訳『群衆と権力』法政大学出版局)

Focillon, H.: *Vie des formes, suivi de Eloge de la main*, Paris 1993.

Housset, E.: *L'ame et la main*, in: Institut d'arts visuels: *La Main*, p.23-41.

Hsiung, P.M.: *La main du maitre. Sur la peinture et la calligraphie chinoises*, in: Institut d'arts visuels: *La Main*, p.183-194.

Gehlen, A.: *Der Mensch. Seine Natur und seine Stellung in der Welt*, Wiesbaden 1978. (平野訳『人間：その本性および世界における位置』法政大学出版局)

Goodman, N.: *Ways of Worldmaking*, Indianapolis 1978. (菅野・中村訳『世界制作の方法』みすず書房)

Hertz, R.: *La prééminence de la main droite. Etude sur la polarité religieuse*, in: Ders.: *Sociologie religieuse et folklore*, Paris 1970 (1978). (吉田・内藤・板橋訳『右手の優越：宗教的画極性の研究』垣内出版)

Irrah, G.: *Universgeschichte der Zahlen*, Frankfurt/M., New York 1986. (彌永・丸山・後平訳『数字の歴史—人類は数や量のよびごなをいかにたか—』平凡社)

Institut d'arts visuels(ed.): *La Main*, Orléans 1996.

Leroi-Gourhan, A.: *Hand und Work*, Frankfurt/M. 1988.

Levame, J.H.: *Main-objet et main-image*, in: *Eurasie. Cahiers de la Société des Etudes euro-asiatiques*, No.4, Paris 1993, p.9-18.

Nissen, H.J., Damerow, P., Eglund, R.K.: *Frühe Schrift und Techniken der Wirtschaftsverwaltung im alten Vorderen Orient. Informationspeicherung und verarbeitung vor 5000 Jahren*, Ausstellungskatalog, Berlin 1990.

Salamito, J.M.: *De l'éloge des mains au respect des travailleurs. Idées gréco-romaines et christianisme antique*, in: Institut d'arts visuels: *La main*, p.51-75.

Pelegrin, J.: *La main et l'outil préhistorique*, in: *Eurasie. Cahiers de la Société des Etudes euro-asiatiques*, No.4, Paris 1993, p.19-25.

Wittgenstein, L.: *Philosophische Untersuchungen*. In: Schriften, Frankfurt/M. 1960. (黒崎訳『哲学的探求』産業図書、藤本訳『哲学探究』大修館書店)
Wittgenstein, L.: *Über Gewissheit*, Frankfurt/M. 1969. (黒田訳『確実性の問題』大修館書店)

【訳者解題】

本稿は、Gunter Gebauer “The Worldmaking of the Hand” の全訳である。この論文は、C. Wulf が編集する *Vom Menschen: Handbuch Historische Anthropologie* (Beiz, 1997) に収録されたドイツ語論文 “Die Hand” をもとに、広島芸術学会第五〇回例会（一九九九年十二月十一日、広島県立美術館講堂）のために作成された英語の論文である。例会での発表のために最初に準備された論文は “The Hand” というタイトルであり、当日の発表に対して訳者は「〈手〉についての美学的考察」という邦題を付した。この論文を『藝術研究』に寄稿するに際し、著者により若干の加筆修正がなされ、タイトルは上述のように改められ、それに応じて邦題は「〈手〉の世界制作について」と変更した。

本稿の著者 Gunter・Gebauer は、一九四四年生まれ、一九七五年に「哲学」の大学教授資格 (Habilitation) を取得、現在、ベルリン自由大学教授である。また、九五年からベルリン自由大学歴史人

間学学際センター長を務め、九九年八月から二〇〇〇年三月まで、広島大学大学院教育学研究科・学習開発専攻基幹講座の客員教授として広島大学に滞在した。専門は哲学がベースであるが、関心は社会学、歴史学、美学などの幅広い領域に広がり、具体的なトピックに即した多彩な研究を展開している。彼が所属するセンター名にある「歴史人間学」が彼の研究のキーワードの一つである。歴史人間学に関しては、上述の学習開発専攻基幹講座が発行した『学習開発研究』（第一号、二〇〇〇年）に、Gebauer の論文 “What is Historical Anthropology?” (二一九―二二三頁) と、樋口によるこの翻訳・解説 (二二五―二三五頁) が掲載されている。

本稿に関係する Gebauer の編著書として、*Körper und Embildungsraft* (Reimer, 1988)、『*Historische Anthropologie* (Rowohl, 1989)』*Minnesis. Kultur-Kunst-Gesellschaft* (Rowohl, 1992) (English edition: *Minnesis: Culture, Art, Society*, University of California Press, 1995)、『*Praxis und Ästhetik* (Suhrkamp, 1993)』*Spiel, Ritual, Geste: Mimnetisches Handeln in der sozialen Welt* (Rowohl, 1998)、『*Anthropologie* (Reclam, 1998) など。このほか *Spiel, Ritual, Geste: Mimnetisches Handeln in der sozialen Welt* は近年中に邦訳出版が予定されている。また、M. Kelly がチーン・ヘバウターと共同で Oxford University Press から出版された *Encyclopedia of Aesthetics* (全四巻、1998)

で、C. Wulfと共著で *Mimesis* の項目を執筆している。

本稿は、事物と身体を媒介する手の機能に着目し、「世界制作」という視点から手をめぐる諸問題を考察したものである。ゲバウアの考察の理論的背景には「身体」への強い関心がある。認識論的な世界構成の問題を身体の問題として捉え直すことがゲバウアの基本的関心であり、この論文では、身体の中でも突出した形態と機能を有する手が取り上げられた。

手といったまさに身近な対象から人間の文化や社会についての考察を展開するという試みは、通常の「哲学」の議論とは様相を異にし、ユニークで斬新な印象を与える。しかしながら、手についての哲学的省察がこれまで全くなかったわけではなく、訳者がすぐに思い至るのは、今道友信の「手についての瞑想—手と精神—」(週刊カセット出版、一九七六年)である。歴史的世界に刻印する手の働きや、指の動作と道具さらには技術連関との関係、また手振りの表現性の問題など、ゲバウアの考察に接続可能な論点のいくつかを、すでに今道の省察の中に見出すことが可能である。しかし、両者の決定的な相違点は、今道が手を人間の精神の空間化をもたらし、そして手を精神あるいは永遠と自然を結ぶ媒介者と見なすのに対し、ゲバウアの考察はその存在論的視点を完全に欠いていることである。おそらくここに、本稿で取り上げられた問題をさらに展開させる一つの方向性があるだろう。いわゆる「精神」の問題に対し、これま

での哲学的視点とは(そして今道の形而上学的視点とも)違った側面から光を当ててくることを、ゲバウアの手についての考察は誘うのである。

さらに、坂部恵の「ふれる」ことの哲学(「ふれる」ことの哲学—人称的世界とその根底」岩波書店、一九八三年)もまた、本稿の問題との関わりを含んでいる。坂部が指摘する「ふれる」と「さわる」の区別を端的な単語の違いによって示すことは、ゲバウアには不可能である。それゆえに、自—他、内—外、能動—受動といった区別を超えた相互浸透的な根源的経験を「ふれる」ことに見出す坂部の論を参照することによって、ゲバウアが論じる手の持つ意味がさらに広がる。要するに、対象に対する明晰な位置を前提にするヨーロッパ近代の思考法への批判的視点が見えてくるのである。それはゲバウアもまた共有しうる視点である。

ところで、本稿は広島芸術学会の研究例会で口頭発表されたほか、そのドイツ語版(“Die Hand und die Konstruktion der Welt”)が山口大学の哲学研究会(二〇〇〇年三月十六日)でも発表され、日本の研究者との間でいくらかのディスカッションがもたれている。総じて、本稿は日本の研究者に多義的な印象を与えており、本稿において見出されるさまざまな論点からさらに議論は展開されなければならぬ、というのが正直なところであろう。しかしながら、ディスカッションにおいては不要な行き違いも散見された。手の問題に

こだわりすぎている、などというのは馬鹿げた発言だ（なぜならば本稿は「手について」の論考なのだから）が、手さらには身体の持つ働きや意味を過剰に評価しすぎているのではないかといった感想が、言語や認識の問題の研究者から呈示された。この感想はゲバウアの意図に沿うものではない。言語の持つ機能を手が果たしうるなどということを彼は論じようとしているのではない。先にもいくらか触れたように、観念や精神と手の関わりについてはペンディングになったままであるし、また言語論的転回以降の認識問題に言及するのは世界制作という観点においてであり、いわゆる認識問題に新たなアプローチを身体論の側面から試みようというのがゲバウアの基本的意図なのである。また、制作や構成といった手の持つポジティブな側面のみが取り上げられているという本稿に対する印象も、やはりゲバウアの論の全体像からすれば誤解である。というのは、彼のミーメーシス論においては、ジラールに依拠しつつ暴力論の興味深い展開がなされているからである。

最後に芸術研究との絡みで本稿を見てみれば、身振りに代表されるようなパフォーマンス的行為の美学として芸術という営み・行為を検討しなおす視点の広がりや予想できるだろう。しかしながら、本稿ではそれが示唆されているにすぎない。

（グンター・ゲバウア ベルリン自由大学）

（ひぐち・さとし 広島大学）